



北方民族博物館だより

No. 111



H30.14 カケス用ワナ 北海道アイヌ 北海道／平取町
41.0 x 77.0 x 77.0 cm 2018年 川奈野一信氏製作

アイヌ語名：エヤミカ。製作者が子供の頃に使っていたものを復元。トウモロコシなどの餌を使いカケスをおびき寄せる。木とヒモで出来た仕掛け（トリガー）にカケスが触れると、カゴが落ちて捕らえることができる。かつて子供達はこうした罠を使ってカケスを捕らえていたという。

目次 Contents

- 1 表紙 カケス用ワナ
- 2 - 4 第33回北方民族文化シンポジウム網走
「環北太平洋地域の伝統と文化3 カムチャツカ半島・千島列島」
- 5 講演会「最後の開拓地アラスカ 30年の変化を見つめる」
／講座「アラスカ先住民イヌピアットの村で」
- 6 講習会「北西海岸先住民の技：チルカット織りのペンダント」
／研修会「アイヌ文化資料取扱研修会」
- 7 ロビー展「エカシの記憶を辿って～昭和のアイヌのくらし～」
／講座「エカシの語りを聞く」
- 8 INFORMATION

第33回北方民族文化シンポジウム網走

環北太平洋地域の伝統と文化3 カムチャツカ半島・千島列島

2018. 10. 6-7

今年の北方民族文化シンポジウムでは、環北太平洋地域を対象としたシリーズの第3回目として、カムチャツカ半島・千島列島を取り上げました。以下に各発表の概要を報告します。

* * *

【第1部】カムチャツカの先住民文化（座長：大島稔氏（小樽商科大学名誉教授）、コメンテーター：岸上伸啓氏（人間文化研究機構）

「進歩したデジタル化技術を通じたシベリアの文化的概念と実践の共有：多様な利用者のための多機能アーカイブとインターフェースに向けて」E.カステン氏（シベリア財団）

近年、シベリア財団では、「北方デジタル人文科学」(DHN)の構想を開始した。この構想は、収集したデータに効率的にアクセスするためのデジタル技術と新たな記録形式の開発を目的としている。この構想に基づき、研究者や文化遺産関係機関の所蔵資料がDHNデータベースの形式で、収集されることになっている。多様なニーズに対応したインターフェースにより、こうしたデータベースは科学者や一般の人、そして危機に瀕した言語や文化的知識を維持する地域集団のニーズや興味に対応できる。

2018年、シベリア財団は多くのワークショップを開催している。「国際共同構想：北方文化・言語の電子的書庫（北方書庫ICICLE）」ネットワークはすでに開始され、今後は多様な資料に含まれる先住民知識に関する音声や映像などを結びつける、新たなデジタル形式を創出するためのプロジェクトが計画されている。



E. カステン氏

【第2部】千島列島の先史文化（座長：中田篤（当館））

「世界システム分析と流動的コンタクト・ゾーンからみた千島列島の考古学と歴史」A. ヴァシレフスキイ氏（サハリン国立大学）

島嶼の特徴である環境の不安定性により、島嶼のシステム内に「自然-社会」、「社会-社会」、「集団-集団」など、多方向の葛藤が生じる。千島列島はこうした「コンタクト・ゾーン」の典型的で明瞭な事例と考えられる。

文明理論において、千島列島は異文化の十字路ととらえることができる。千島列島の人びとは、中世（7～16世紀）には世界システムの東アジアにおける「中央」の圏内に絶えず流入していた。そして近現代（17～20世紀）、千島列島は、厳しく対立する二つの世界システムの「中央」に対して周辺地域となった。世界システムへの参入によって、千島列島の先住民集団の伝統的生活は全面的に破壊されることとなつた。そして最終的に千島列島の歴史は、関連する二つの「中央」である日本とロシアの歴史、そして日露関係史の一部となっている。



A. ヴァシレフスキイ氏

「北太平洋における千島列島：過去の集落に対する生態学的、社会的、文化的影響」B.フィッツヒュー氏（ワシントン大学）

本発表では、千島列島の集落の歴史に関する最近の大規模な研究プロジェクトの調査結果について報告した。千島列島には、縄文草創期～前期、後期～晩期の人びと、続縄文時代の人びと、オホーツク文化人、アイヌ、日本人、ロシア人などの文化的集団が居住してきた。それぞれの時期、居住集団と島の地理、生態、周辺地域との間では、異なる関係が築かれていた。それぞれが集落、移動性、社会関係に関して、異なるアプローチをとっていたのである。続縄文文化期とオホーツク文化期の事例では、未知の原因によって集団が崩壊したり、居住地が放棄されたりするという結末を迎えた。本研究で文化的、生態的適応や隣接集団との関係を検討することにより、過去の人間社会の脆弱性と回復力について理解を深めることができた。これらの結果から得られた教訓は、現代の人間と環境との関係を適切に管理するためにも有益と考えられる。



B.フィッツヒュー氏

「千島アイヌの出現と居住域の変化—考古学からの展望—」 高瀬克範氏（北海道大学大学院文学研究科）

カムチャツカ半島南部から北千島に分布するナルィチエヴォ文化は、その構成要素として内耳土器が存在することから、千島アイヌ（およびその直接の祖先集団）によって残された考古学的文化であることが明らかである。カムチャツカ半島における発掘調査に基づく内耳土器の型式や分布の検討により、千島アイヌは15世紀半ば～17世紀半ばに、北千島～カムチャツカ半島南部に広く居住していたことが示された。その後、カムチャツカ半島における分布は南端部の限定された地域に縮小し、19世紀になると彼らの居住地は北千島に限られるようになる。近年の研究によって、千島アイヌがカムチャツカ半島における分布を縮小させた時期は、18世紀初頭であることが示された。一方、現時点で千島アイヌの起源地の特定は困難だが、カムチャツカ半島・北千島地域の最古の内耳土器と類似した遺物が出土することから、南サハリン、南千島が重要な候補になると考えられる。



高瀬克範氏

【第3部】カムチャツカの先住民言語（座長：津曲敏郎（当館）、コメンテーター：呉人恵氏（富山大学））

「カムチャツカ北部の先住民言語地名」永山ゆかり氏（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

カムチャツカ半島北部からチュコト半島にかけて、チュクチ・カムチャツカ諸語を話す先住民が居住してきた。この地域の地図に記された地名の多くは、先住民言語の地名に由来する。また、地図には示されないが、地元の人々に共有される小さな支流の名称などの地名もある。しかし、これまでこうした先住民言語の地名調査はほとんど行われてこなかった。本報告では、カムチャツカ地方北東部・アナプカ村周辺地域を対象に、現地のアリュートル語地名を紹介する文献資料の記載内容を検討するとともに、報告者自身による地名調査の成果から、ロシア語地名との違いや、アリュートル語による地名の多くが先住民の生業と関係していることを示した。さらに、アリュートル語・コリヤーク語・チュクチ語の音韻上の差異から、地名から読み取れるそれぞれの言語の歴史的分布に関する仮説を提示した。



永山ゆかり氏

「イテリメン語の類型論的特徴—系統か接触か」小野智香子氏（千葉大学人文公共学府 地域研究センター）

チュクチ・カムチャツカ語族に含まれる言語のなかで、チュクチ語、コリヤーク語、ケレク語、アリュートル語（以下チュクチ・コリヤーク諸語）が同じ言語の方言程度の違いであるのに対し、イテリメン語は大きく異なっている。

イテリメン語とチュクチ・コリヤーク諸語には、人称代名詞や人称接辞などについていくつか共通点がある。しかし、例えばチュクチ・コリヤーク諸語では、語形成の手段として抱合や複合語があるが、イテリメン語には両者とも存在しないなど、多くの文法上の特徴が異なっている。また、イテリメン語の語彙の7割以上が、チュクチ・コリヤーク諸語とは異なっている。本報告では、こうした類似点・相違点を整理し、言語類型上のイテリメン語の位置に関して問題提起とともに、イテリメン語と周辺言語との関係について検討した。



小野智香子氏

【第4部】千島アイヌの歴史と文化（座長：中村和之氏（函館工業高等専門学校））

「1771年のウルップ島におけるアイヌ民族対ロシア人の戦い」川上淳氏（札幌大学）

ロシア側と日本側の史料により、18世紀の千島列島におけるアイヌとロシアとの関係を再検討した。18世紀、ロシアは毛皮税徴収とアイヌ支配のため千島列島を南下する。当初アイヌは強制的な毛皮税徴収に服従せざるを得なかった。1770年、プロトジャコノフ一行がウルップ島でラッコ猟を開始したが、ウルップ島は以前から千島アイヌのラッコ猟場だったため、両者の間で軋轢が生じ、1771年には戦いに発展した。

この戦いの際、ロシア側はアイヌの宝物を奪った上、エトロフ島アイヌ2名を射殺した。一方、エトロフ島とラショワ島のアイヌが連携し、従者を含むロシア人約20名を殺害した。アイヌが連携していたこと、またロシア側と対等以上に戦った事実から、この戦いの歴史的意義や千島アイヌとロシアとの関係を考察した。



川上淳氏

「近代日本と千島列島のアイヌ民族」麓慎一氏（新潟大学）

1875年、日本とロシアは樺太・千島交換条約を締結し、千島列島は日本領となった。辺境で厳しい気候の千島列島には、日本政府の統治が行き届かなかった。そのため、政府は千島列島北部のアイヌを1884年にシコタン島に移住させた。その後、移住したアイヌの多くが病気で死亡したため、政府は方針を転換し、千島列島北部に帰還させようとした。しかしそれは実現できず、帰還ではなく、アイヌを千島列島北部に出稼ぎさせるという政策に変更された。この出稼ぎは1897年に試行され、1899年から正式に実施されたが、1910年には中止されることとなった。

本報告では、千島アイヌをめぐるこうした日本政府の政策を考察する。特に千島列島が置かれた国際的な情勢を考慮し、アイヌに対する日本政府の政策の意義を検討した。



麓慎一氏

* * *

それぞれの発表では、カムチャツカ半島、千島列島だけではなく、北海道やサハリンとの関係に言及したり、さらに広く環北太平洋地域全体を視野に入れるものもありました。北海道にも近い千島列島がテーマに含まれていたためか、一般参加者は2日間で延べ97名に達し、発表者やコメンテーターも含めて熱心な質疑がおこなわれました。

なお、シンポジウム関連事業として、9月19日（水）18:00よりオホーツク・文化交流センターにて、阿寒湖畔在住のアイヌの姉妹を主人公としたドキュメンタリー映画「kapiwとapappo～アイヌの姉妹の物語～」の上映会がおこなわれました。こちらには網走市民を中心に142名の方にご来場いただきました。（学芸グループ 中田 篤）



シンポジウム会場の様子

講演会

最後の開拓地アラスカ 30年の変化を見つめる

2018. 9. 22

講師：岡田淳子氏（前当館館長）

特別展関連事業として、前当館館長の岡田淳子氏にお越し頂き、講演会を開催いたしました。岡田先生は1972年から南西アラスカ、ポートモラーのホット・スプリング遺跡で発掘調査を開始され、その後はネルソン島、ヘケタ島、プリンス・オブ・ウェールズ島、アネット島メトラカトラなどで調査を行ってきました。今回の講演では特にポートモラーの考古学的成果と、ネルソン島のエスキモー社会の文化人類学的成果が取り上げられました。



岡田淳子氏

ホットスプリング遺跡の調査当時、岡田先生は文化圏の境界に关心をもっていました。遺跡周辺は現在はアリュートが暮らしていますが、アリュート文化とエスキモー文化的な境界にあたります。4000年前の住居址で見つかる人骨はアリュートではなく、ベーリング海峡近くのエスキモーの骨とよく似ており、この地域の人々が南下してきたと考えられます。2000年前頃に埋葬の仕方が変わります。ここでみつかった人骨は南西アラスカのエスキモーやアリュートのものと類似していました。ホットスプリング遺跡の調査を通じて、文化圏の境界は常に動いていること、また人口希薄地帯が境界となるということが分かったといいます。

1974～80年にかけて、ネルソン島の調査が行われました。この地域のエスキモーはかつては夏の村と冬の村との間を季節ごとに移動して暮らしていました。1970年代前半にエンジンを積んだ船舶が普及し、遠距離でも日帰りできるようになって定住化が進みました。1970年代後半には村落に何本も通信用のアンテナが立つようになり、また飛行場が整備され、定期便が飛ぶようになりました。

1960年代のネルソン島は岡田先生の師匠である岡正雄氏の報告によって、比較的伝統的な生活と変化の兆しを知ることができます。1971年の「アラスカ先住民土地請求処理法 (ANCSA)」により、先住民の自立意識がめばえ、土地や資金を利用した事業が活発化していきました。その後は米国などの文化を積極的に受け入れるようになり、社会が大きく変化していったとまとめられました。

(学芸グループ 野口 泰弥)

講座

アラスカ先住民 イヌピアットの村で

2018. 9. 29

講師：是恒さくら氏（美術家）

特別展の関連事業として、美術家の是恒さくら氏にお越し頂き、是恒氏によるアラスカと日本各地の捕鯨文化の調査とイヌピアットの生活について解説いただきました。

是恒氏は2006年からアラスカ州立大学に留学し、アラスカ先住民芸術を学ばれました。今回のお話はアラスカ・デーリング村での伝統的なイヌピアットのモノ作りに特に焦点が当てられました。

是恒氏はアラスカ州立大学に入学された最初の年に、北極海沿岸の各集落に手紙を送り、伝統的なモノ作りを教えて貰える方を探しました。その手紙を読んで、声をかけてくれたのが、当時、デーリングに暮らしていたイヌピアット女性、アグネス・ヘイルストーン氏でした。

実はヘイルストーン氏は当館とも関わりがあります。今回の特別展にはヘイルストーン氏に製作頂いた伝統的なイヌピアットのパーキ（パークー）を展示しています。

是恒氏はヘイルストーン一家のもとに二ヶ月半ほど滞在し、モノ作りを教わりました。例えばウグルック（アゴヒゲアザラシ）の腸の加工法、カリブー（トナカイ）製のパーキ作りがあります。ウグルックの腸はレンコートの素材として使われます。水の浸入を防ぐために、素材作りとしての腸の加工にも、穴が開いたりしないように細心の注意が払われるといいます。

また、カリブー毛皮のパーキ作りについては、ヘイルストーン氏が製作した当館のパーキの中にも、様々な創意工夫や意図が込められていることが説明されました。例えば裾、袖、首元など、パーキの先端部にはオオカミやウサギの毛、ビーバーの毛皮が使われます。これはカリブーの毛皮が破れやすいため、痛みやすい箇所に別種の毛皮が使われる、また袖は日常生活で水に濡れやすいため、水に強い毛皮が用いられるなどの工夫があることなどを解説くださいました。

この他にも、是恒氏のお話には、実際に自分の手でパーキを作った経験がある人でしか気づかないような視点が多く含まれており、来館者も是恒氏が製作されたパーキに触れたり、カリブー皮の匂いをかいだりと楽しまれています。



是恒さくら氏



是恒さくら氏

講習会

北西海岸先住民の技： チルカット織りのペンダント

2018. 9. 30

講師：是恒さくら氏（美術家）

特別展「North to the Future 北方から未来へ—日本人が出会ったアラスカ」の関連事業として、講習会「チルカット織りのペンダント」を開催しました。

チルカット織りは、北西海岸インディアンのなかのグループ名がつけられた、シダー（マツ科の針葉樹）の樹皮とシロイワヤギの毛が材料になった織物です。ローブ（マント）に仕立てられることもあり、これを身に着ける人は大変地位のある人でした。

シダーの樹皮とシロイワヤギの毛を撚った糸を縦糸に、シロイワヤギの毛のみでできた糸を横糸にします。糸は、黒、黄色、水色に染められることが多く、染めていない白とあわせて4色が使われます。黄色はコケで染められています。チルカット・ローブには着る人に関連する文様が、中心から左右対称に織り込まれます。

今回の講習会では、世界の織物のなかでも、もっとも複雑なもの一つと言われるチルカット織りに挑戦しました。講師のは恒さくら氏は、現地で織り手から直接に技法を習いました。チルカット織りは、上から下へと織っていきます。このため、は恒氏に講習会用の織機を作成いただきました。

講習会では、縦糸にはたこ糸を、横糸には毛糸を用いました。他の織機のような、^{おさ}_ひや杼といった道具は使わずに、織機から吊した縦糸に横糸をねじりながら入れていきます。

難しい講習会になることが予想されていたので、糸に番号札をぶら下げるなどの工夫も行いましたが、参加者は皆苦戦し、展示しているチルカット・ローブの見事さを感じていたようです。

（学芸グループ 笹倉 いる美）



織機を操作する
是恒氏

研修会

アイヌ文化資料取扱研修会

2018. 11. 11

講師：神庭信幸氏

（元東京国立博物館文化財部保存修復課長）

博物館資料を永く適切に保管するためには、学芸員の知識・技術の研鑽と向上が欠かせませんが、適当な研修会が北海道内ではあまり実施されていないこともあり、当館で元東京国立博物館文化財部保存修復課長の神庭信幸氏を講師にお迎えして開催することにしました。

研修会は三部で構成しました。

講義1は、神庭氏が提唱する臨床保存学がテーマでした。学芸員がまず心がけるのはオリジナルを残すことであり、博物館に資料を保管することはリスクを集中させることでもあること。資料の適切な保管には、短期、中期、長期のグループで考え、対応もそれにあわせることが説明されました。

そして資料保存においては、従来別々にされてきた診断、予防、修理を一体の方法論とする臨床保存学の考え方方が有効であることを紹介されました。

講義2は劣化の要因と資料の使用痕、質感、形状等への影響が、どの程度の関連があるかを各人考えて表を埋める作業を行いました。例えば高温多湿が色彩に影響を与えると考えた人は、表にチェックをいれます。表全部にチェックがはいる人もいれば、少ない人もいます。正解があるということではなく、お互いの考え方を知り、これが各館の保管計画につながってゆきます。

また講義1で学んだ臨床保存学の実践として、カルテとよばれる調書への記載方法の説明がありました。特に重要なのは医者がカルテをつけるように、その場で清書しないで書き込むことだそうです。

講義3は収蔵時における梱包の実習でした。ベストな梱包資材の紹介もありましたが、それが手に入らないからといって、何もしないのがよくないとの実際的で現実的な内容で、小規模な博物館の学芸員にとって有意義な研修会となりました。（学芸グループ 笹倉 いる美）



梱包の実演をする神庭信幸氏（中央左）

ロビー展

平取町立二風谷アイヌ文化博物館巡回展

エカシの記憶を辿って ～昭和のアイヌのくらし～

2018.10.27-11.25

近年、現代のアイヌ文化に関する博物館展示のあり方が議論され、過去の「伝統」に焦点をあてるだけではなく、現代の多様なアイヌ文化をいかに展示していくべきなのかという点が大きな課題になってきました。このような近年の展示動向を踏まえつつ、本展では今を生きる一古老人のライフストーリーを通して、昭和から現在までの生活や今の思いを紹介しました。

展示の主人公になって下さったのは、北海道平取町で生まれ育ったエカシ（老翁）・川奈野一信さん（84歳）です。企画者である私は文化人類学を専門とし、2006年から川奈野家に滞在しながら調査を行ってきました。以来聞き取ってきた語りの蓄積が、二風谷アイヌ文化博物館での企画展（2017年）に繋ぎました。

その巡回展として、新たな資料を加えて再公開したのが、本ロビー展です。

会場の冒頭に配置した映像『<今ここ>に



会場の様子

つながるエカシの記憶』では、エカシがかつて暮らしたコタン（集落）や小学校跡を訪れ、今の思いを赤裸々に吐露しています。

展示は3部構成とし、第1部では幼少期から青年期にかけて暮らしたコタンでの生活文化を紹介し、祖母から教わったという延縄やエヤミカ（カケス落とし）などを展示しました。第2部では、中学卒業後、両親とともに広い土地を求めて戦後開拓に入った様子や、造材・流送業で生計を立てた戦後のくらしを紹介しています。第3部では、エカシが現在力を注いでいる文化継承活動と妻の元子さんが家の合間に製作しているアットウシ（樹皮衣）やイナウソ（文様つきのござ）などの作品も展示しました。

記録されなければ消えてしまうであろうエカシの語りが道立博物館で展示されたことは、歴史化への一步となりました。博物館がこのような個別の語りに着目することは、アイヌの人々の「生きられた歴史」を開いてゆくことになると考えています。

展示開催においては、両館をはじめ関係者の皆様方から多大なご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

（展示企画者／横浜市立大学客員研究員 吉本 裕子）

講座

エカシの語りをきく

2018.10.27

講師：川奈野一信氏（平取町二風谷アイヌ語教室運営委員長）
吉本裕子氏（横浜市立大学客員研究員）

ロビー展「エカシの記憶を辿って～昭和のアイヌのくらし～」の関連事業として、川奈野一信エカシにお越し頂きトークイベントを開催しました。吉本が聞き手になり、聞き取り調査の場面を再現するような対話形式で進めました。



講師の川奈野一信氏（左）と吉本裕子氏（右）

平取町を流れる沙流川筋では、明治40年代から王子製紙が針葉樹の伐り出しを開始し、事業請負人であった坂本竹次郎（のちの坂本木材「屋号まるたけ」）が沙流川での流送を取り仕切るようになりました。昭和20年代後半まで、沙流川筋には大きな飯場が立ち並び、町は活気に満ち溢れていたそうです。エカシは10～20代にかけて年配の男衆と共に造材や流送の仕事に従事し、飯場暮らしを経験しました。年配の人たちは、仕事が終わって飯場に戻ると焼酎を飲みながら「まるたけ数え唄」をよく歌っていたそうです。今回エカシは、60年以上前の飯場で歌われていた「まるたけ数え唄」を朗々と歌い上げ参加者を魅了しました。

講座の終盤には、エカシが本ロビー展のために新たに復元したテン用ワナ（アイヌ語でホイヌアクペ）の実演を行いました。テン用ワナは、二風谷アイヌ文化博物館企画展の展示資料にはなかったのですが、企画展開催中にエゾクロテンの研究者である村上隆広氏（斜里町立知床博物館館長）が偶然二風谷を訪れ、エカシと会話を交わしたことがきっかけで復元に至りました。エカシはテン用ワナを作成した経験はありませんでしたが、村上氏と話をするうちに、かつて同じ集落に住んでいた古老がテン用ワナで小動物を獲っていた記憶が蘇ってきたそうです。復元第1作は知床博物館に収蔵され、当館には復元第2作、第3作が收められました。参加者2名がワナ体験に臨み、仕掛けワナの威力に圧倒されていました。

参加者の多くは網走周辺の方々でしたが、遠くは首都圏からご参加の方もありアイヌ文化への関心の高まりを感じました。

（展示企画者／横浜市立大学客員研究員 吉本 裕子）

ロビー展 オホーツクシリーズ12「北の状景から」

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」。第12回目は、この時期恒例の写真展「北の状景から」です。

オホーツク地域に縁のあるアマチュアカメラマンの作品により、豊かな自然や人びとの日常生活、イベントの風景など、オホーツク地域の魅力を切り取った一コマを紹介します。

□会期：平成31年1月5日(土)～1月20日(日) 観覧無料

□会場：北方民族博物館ロビー

□主催：北海道立北方民族博物館



女性用衣装／サハ

企画展 融ける大地—温暖化するシベリア・中央ヤクーチア

サハ共和国中央部の自然環境、特にサモカルスト地形とその変化、サハの文化や現在の生活との関係について紹介します。

□会期：平成31年2月2日(土)～4月7日(日) 観覧無料

□会場：北方民族博物館特別展示室

□主催：北海道立北方民族博物館

関連事業

2月2日(土) ①10:00-10:30 ②13:30-14:00 展示解説会

(担当：中田篤主任学芸員)

2月16日(土) 9:30-11:30 講習会 サハの刺繡

(講師：ナターリヤ・ネウストローエヴァ氏 版画家／イラストレーター)

2月17日(日) 10:30-11:30 講座 凍土の融けゆく大地

(講師：飯島慈裕氏 三重大学准教授)

INFORMATION

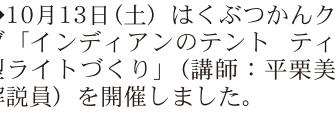
行事報告

◆9月15日(土) 講習会「グリーンランドのリストウォーマー作り」(講師：結城伸子氏)を開催しました。



指導する結城伸子氏

◆9月16日(日) 講習会「サミのブレスレットづくり」(講師：結城伸子氏)を開催しました。



◆10月13日(土) はくぶつかんクラブ「インディアンのテント ティピ型ライトづくり」(講師：平栗美紅解説員)を開催しました。



ライトづくりに取り組む参加者

◆10月20日(土) 講習会「アイヌ文化講習会 刺繡」(講師：西田香代子氏)を開催しました。



講習会の様子

◆11月3日(金・祝) 第10回はくぶつかんまつりを開催しました。

くじら串やユケオハウ(シカ肉の煮込み汁)の販売、モルック体験、マシュマロ焼き体験、ミニコンサートやクイズなどさまざまなイベントを実施しました。



モルック大会上位入賞者の皆さま

◆11月9日(金)～10日(土)「平成30年度アイヌ文化普及啓発セミナー(網走会場)」(主催：アイヌ民族文化財団、当館共催)を開催しました。

◆11月17日(土) はくぶつかんクラブ「サミの紐織り腕時計づくり」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。

◆11月23日(金・祝) オホーツク・文化交流センターにて「あばしりまなび塾フェスティバル」(主催：同実行委員会)に出展しました。当館のコーナーには250名を超える参加者が来場し、「ほっこりキャンドルライトづくり」を楽しみました。

調査報告

◆11月7日(水)～11月20日(火) 中田篤主任学芸員がサハ共和国で現地調査を行いました。

北方民族博物館だより

No. 111

平成30(2018)年12月22日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<http://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会